

## 「新名神高速道路」開通がもたらすもの

本年、3月17日に「新名神高速道路」(以下、新名神)の三重県内区間が全面開通した。これにより、名古屋圏と関西圏の往来が劇的にスムーズになった。

地図で俯瞰すると理解が進むが、東京から“走ってくる”東名高速道路と新東名高速道路は、愛知県豊田市にあるJCTで交差する。そこから、山側(岐阜県側)を回る、名神高速道路・方面と、海側(三重県側)を回る新名神高速道路・方面に分かれる。次に両高速道路が合流するのは、関西圏の入り口、京都の手前の滋賀県草津市だ。

新名神が開通するまで、三重県内の高速道路については「東名阪自動車道」(以下、東名阪)を経由し、名古屋圏と関西圏がつながっていた。このことで、三重県の大動脈である東名阪は、全国有数の渋滞道路となっており、長年、三重県の観光振興、産業発展を妨げる要因となっていた。新名神の開通、そのバイパス効果でこれが大きく改善されている。

新名神開通から1か月間では、前年の同時期と比べて東名阪の渋滞発生回数は77%も減少。このような副次的なインフラ改善もあり、新名神開通の経済効果は観光消費だけで年間500億円近いと試算したシンクタンクもある。折しも、5月に改元があった今年、伊勢神宮への参拝客数が大幅に増えているが、東名阪の渋滞緩和もこれに寄与していると考えられる。地元の大規模レジャー施設やゴルフ場からは「新名神効果で来場する客が増えた」との声が聞こえてくる。インバウンドにおいて三重県は、隣県の岐阜に比べ外国人宿泊者数が1/3程度と遅れをとってきた。渋滞問題が解消した本年以降、その様相も変わってくるだろう。

中日新聞社 広告局広告三部 三重アドセンター所長 中村広樹

本年3月17日に三重県内区間が全面開通



新名神高速道路、鈴鹿市あたり